

1. 略歴

1992 年 4 月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1996 年 3 月	同教養学部教養学科第一（表象文化論）卒業
1996 年 4 月	同大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門分野）修士課程入学
1998 年 3 月	同修士課程修了、修士（文学）取得
1998 年 4 月	同博士課程進学
2005 年 10 月	同博士課程修了、博士（文学）取得
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教
2008 年 4 月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 准教授
2015 年 4 月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授
2015 年 4 月	ロンドン大学ゴールドスミス校客員研究員（～2016 年 3 月）
2017 年 4 月	国際日本文化研究センター共同研究員（～現在）
2019 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 主要業績

(1) 単著

- 『ヴァーグナーの「ドイツ」——超政治とナショナル・アイデンティティのゆくえ』、青弓社、2009 年 10 月、406p.
『〈音楽の国ドイツ〉の神話とその起源——ルネサンスから十八世紀』（〈音楽の国ドイツ〉の系譜学 1）、青弓社、2013 年 2 月、228p.
『民謡の発見と〈ドイツ〉の変貌——十八世紀』（〈音楽の国ドイツ〉の系譜学 2）、青弓社、2013 年 9 月、318p.
『絶対音楽の美学と分裂する〈ドイツ〉——十九世紀』（〈音楽の国ドイツ〉の系譜学 3）、青弓社、2015 年 1 月、332p.

(2) 共編著

- 吉田寛、篠木涼、櫻井悟史編『特別公開企画 アフター・メタヒストリー——ヘイドン・ホワイト教授のポストモダンニズム講義』、立命館大学生存学研究センター、2010 年 7 月、189p.

(3) 翻訳書（共訳）

- Th. W. アドルノ著、渡辺裕編、村田公一・舩木篤也・吉田寛訳『アドルノ 音楽・メディア論集』、平凡社、2002 年 10 月、356p. 「流行歌分析」（1929 年）および「ラジオ音楽の社会的批判」（1945 年）の翻訳を担当（pp. 114-136、pp. 249-267）

(4) 論文

- 「ハンスリックの「自律的」音楽美学再考——『音楽的に美なるものについて』の成立と改訂の過程を中心に」、日本音楽学会編『音楽学』第 44 巻 2 号、1999 年 6 月、pp. 103-117
「聴衆とは何か——ハンスリックの音楽批評と公共的演奏会活動」、美学会編『美学』第 197 号（第 50 巻第 1 号）、1999 年 6 月、pp. 25-36
「時代を映す鏡としてのハンスリック文献（前編）——同時代的な影響関係からナチズムの反ユダヤ政策まで」、国立音楽大学大学院編『音楽研究 大学院研究年報』第 12 輯、2000 年 3 月、pp. 105-128
「時代を映す鏡としてのハンスリック文献（後編）——戦後の修正的再評価からポストモダンと冷戦後の思潮まで」、国立音楽大学編『研究紀要』第 35 集、2001 年 3 月、pp. 171-182
「神津仙三郎『音楽利害』（明治二四年）と明治前期の音楽思想——一九世紀音楽思想史再考のために」、東洋音楽学会編『東洋音楽研究』第 66 号、2001 年 8 月、pp. 17-36
“Eduard Hanslick and the Idea of “Public” in Musical Culture: Towards a Socio-political Context of Formalistic Aesthetics.” in: *International Review of the Aesthetics and Sociology of Music*. Vol. 32, No. 2（2001 年 12 月）, pp. 179-199
“Zur Idee der musikalischen Öffentlichkeit: Eine erneuerte Interpretation der Musikästhetik Eduard Hanslicks.” in: *Aesthetics*. Edited by the Japanese Society for Aesthetics. No. 10（2002 年 3 月）, pp. 87-94
「音楽思想史にみるドイツのナショナル・アイデンティティ——《音楽の国》の美的政治学（Ⅰ）」、国立音楽大学編『研究紀要』第 36 集、2002 年 3 月、pp. 161-169

- 「E・T・A・ホフマンの音楽美学にみる歴史哲学的思考——器楽の美学はいかにして進歩的歴史観と結びついたのか」、東京大学美学藝術学研究室編『美学藝術学研究』第20号、2002年3月、pp. 155-191
- 「音楽家ダニエル・リベスキンド?——新たな読解可能性のために」、『インターコミュニケーション』No. 43 (第12巻第1号)、2003年1月、pp. 120-128
- 「《Galli cantant...》——古いラテン語の諺の伝承にみるヨーロッパ諸民族の音楽的表象」、国立音楽大学編『研究紀要』第37集、2003年3月、pp. 149-158
- 「アタナシウス・キルヒヤーと音楽の国民様式論」、国立音楽大学大学院編『音楽研究 大学院研究年報』第15輯、2003年3月、pp. 31-60
- 「共鳴する建築——リベスキンドにとって音楽とは何か?」、『ユリイカ 詩と批評』第35巻第4号 (通巻474号)、2003年3月、pp. 190-198
- “La conception herdérienne des chants populaires et une invention du goût universel.” in: *Horizons philosophiques*. Vol. 13, No. 2 (2003年春), pp. 51-58
- 「ロマン主義の音楽思想にみる「ドイツ的なもの」の表象——普遍性という名のポリテイク」、日本シェリング協会編『シェリング年報』第11号、2003年7月、pp. 49-58
- 「ドイツ語擁護運動とドイツ語オペラの成立 (前編)」、国立音楽大学編『研究紀要』第38集、2004年3月、pp. 85-96
- “Sur l'idée de la germanité en musique aux XVIIIe et XIXe siècles.” in: *Horizons philosophiques*. Vol. 16, No. 1 (2005年秋), pp. 125-135
- 「ドイツ語擁護運動とドイツ語オペラの成立 (後編)」、国立音楽大学編『研究紀要』第40集、2006年3月、pp. 81-92
- 「「バックメッサー」以前のハンスリック——ワーグナーとの初期の関係」、日本ワーグナー協会編『年刊 ワーグナー・フォーラム 2006』、2006年7月、pp. 109-123
- 「近代オリンピックにおける芸術競技の考察——芸術とスポーツの共存 (不) 可能性をめぐる」、美学会編『美学』第226号 (第57巻第2号)、2006年9月、pp. 15-28
- 「テレビゲームの感性学に向けて」、多摩美術大学研究紀要委員会編『多摩美術大学研究紀要』第22号、2008年3月、pp. 183-190
- 「ナショナル・オペラの成立と展開——フランス、イギリス、ドイツの場合」、丸本隆 (代表)・伊藤直子・長谷川悦朗・福中冬子・森佳子編『オペラ学の地平——総合舞台芸術への学際的アプローチII』、彩流社、2009年3月、pp. 69-88
- “The Art Competitions in the Modern Olympic Games: Rethinking the Boundary Problem between Art and Sport.” in: *Aesthetics*. Edited by the Japanese Society for Aesthetics. No. 13 (2009年4月), pp. 111-120
- 「聴覚の座をめぐる近代哲学の伝統——ヘルダー、カント、ヘーゲルの場合」、美学会編『美学』第236号 (第61巻第1号)、2010年6月、pp. 25-36
- 「歴史の空白とジャンルの闘争——シューマンと《ベートーヴェン以後》のドイツ音楽」、『思想』第1040号 (2010年第12号)、2010年12月、pp. 27-48
- 「ビデオゲームにとって「リアルな空間」とは何か?——〈第三の次元〉の表現技法を中心に」、神戸大学芸術学研究室編『美学芸術学論集』第7号、2011年3月、pp. 31-49
- 「ユニヴァーサル・デザインはなぜそう呼ばれるか——再起動されたモダン・デザイン」、立命館大学生存学研究センター編『生存学』Vol. 4、2011年5月、pp. 94-112
- 「混合趣味の衰退と民謡の発見——18世紀ドイツ音楽とナショナル・アイデンティティ」、日本ドイツ学会編『ドイツ研究』第46号、2012年3月、pp. 19-33
- 「なぜいまビデオゲーム研究なのか——グローバル化と感覚変容の観点から」、立命館大学国際言語文化研究所編『立命館言語文化研究』24巻2号 (通巻110号)、2013年2月、pp. 93-98
- 「ビデオゲームの記号論的分析」、日本記号学会編『ゲーム化する世界——コンピュータゲームの記号論』(叢書セミオトポス8)、2013年5月、pp. 54-70
- 「ゲーム研究のこれまでとこれから」、日本記号学会編『ゲーム化する世界——コンピュータゲームの記号論』(叢書セミオトポス8)、2013年5月、pp. 160-186
- 「規則と自由の弁証法としてのゲーム——〈ルールの牢獄〉でいかに自由が可能か?」、立命館大学国際言語文化研究所編『立命館言語文化研究』26巻1号 (通巻117号)、2014年10月、pp. 19-27
- 「ゲームにとって死とは何か?——「ゲーム的リアリズム」問題再訪」、『ポピュラーカルチャーの美学構築に関する基盤研究 研究成果報告書 2013-2015年度』(科学研究費助成事業 基盤研究(A)研究課題番号 25244005)、2016年3月、pp. 12-25

「デジタルゲームプレイと「他者」への信頼」、in: *Digital Tribe and Youth Culture of East Asian Regions*. Edited by the Journal of Culture/Science. 2016 年 11 月, pp. 238-257. (韓国語版: 최재혁訳 “디지털 게임 플레이와 ‘타자’에 대한 신뢰.” *ibid.*, pp. 9-26)

「オリンピックにおける芸術競技」、『現代スポーツ評論』第 35 号、2016 年 11 月、pp. 68-76

「(抗い) としてのゲームプレイ——ゲーム的リアリズム 2.0 のために」、『ユリイカ 詩と批評』第 49 巻第 3 号 (通巻 696 号)、2017 年 2 月、pp. 141-152

“디지털 게임 플레이어와 ‘타자’를 향한 신뢰.” (デジタルゲームプレイヤーズと「他者」への信頼) (최재혁訳) in: 계간 『문화/과학』 89 호 (2017 봄) (季刊 『文化/科学』 89 号、2017 年春)、2017 年 2 月、pp. 331-354

「メタゲーム的リアリズム——批評的プラットフォームとしてのデジタルゲーム」、『ゲンロン 8——ゲームの時代』、2018 年 5 月、pp. 76-98

「ギャンブルに賭けられるものは何か——ゲーム研究からの考察」、日本記号学会編『賭博の記号論——賭ける・読む・考える』(叢書セミオトポス 13)、2018 年 8 月、pp. 79-96

「プレイヤー論の射程」、『ポピュラーカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究 研究成果報告書 2016-2018 年度』(科学研究費助成事業 基盤研究 (A) 研究課題番号 16H01912)、2019 年 3 月、pp. 25-30

(5) 小論

「20 世紀音楽とテクノロジー／スペクタクル／ポリティックス——自律性の崩壊の物語をいかに迂回するか」、『インターコミュニケーション』No. 20 (第 6 巻第 2 号)、1997 年 4 月、pp. 116-117

「モノログとしての演奏会からダイアログの空間へ——20 世紀音楽史における「空間」の問題」、『建築文化』第 52 巻第 614 号、1997 年 12 月、pp. 92-95

「音楽批評家ハンスリックとシュトラウスのワルツ」、『ウィーン・リング・アンサンブル・ニューイヤー・コンサート 2000 年日本公演プログラム』、2000 年 1 月、頁表記なし

「音楽芸術と視覚性——「聴覚的＝時間的芸術としての音楽」を再検討する」、多摩美術大学芸術学科『issues』第 4 号、2000 年 3 月、pp. 26-28

「音楽的欲望から五線の平面へ——過剰なる表象としての楽譜 (第一回)」、五十嵐太郎・南泰裕編『エディフィカーレ・リターンズ』、トランスアート、2003 年 7 月、pp. 276-280

「ラトヴィア——フォークソングのふるさと」、『中谷宇吉郎 雪の科学館 通信』号外、2005 年 8 月、p. 2

「いつ、どうして交響曲は「ドイツ的」なものになったのか?」(「シンフォニーの思想と「ドイツ的なもの」の形成」第 1 回)、『フィルハーモニー』第 78 巻第 2 号、2006 年 1 月、pp. 44-48

「近代ドイツ社会の理想的モデルとしてのシンフォニー」(「シンフォニーの思想と「ドイツ的なもの」の形成」第 2 回)、『フィルハーモニー』第 78 巻第 5 号、2006 年 5 月、pp. 46-50

「『第九』神話をこえて——ベートーヴェンとヴァーグナー」、『富士通コンサートシリーズ ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー／大植英次指揮』、2006 年 6 月、pp. 41-43

「ドイツ音楽史の「羅針盤」としての交響曲」(「シンフォニーの思想と「ドイツ的なもの」の形成」第 3 回)、『フィルハーモニー』第 78 巻第 6 号、2006 年 6 月、pp. 22-25

「19 世紀の人々はどのように音楽を聴いたのか?——「聴くこと」の考古学に向けて」、『フィルハーモニー』第 79 巻第 7 号、2007 年 10 月、pp. 28-34

「ベートーヴェンからワーグナーへ——「進化した交響曲」としての楽劇」、『フィルハーモニー』第 81 巻第 8 号、2009 年 11 月、pp. 18-24

「われわれは何を買わされているのか——新リマスターCD から考えるビートルズの「オーセンティシティ」」、『ユリシーズ』No. 2、2010 年 4 月、pp. 100-103

「“コロス”の変容——《ローエングリン》とその演出にみる合唱」、『レコード芸術』第 60 巻第 7 号 (通巻 730 号)、2011 年 7 月、pp. 290-293

「京都展におけるゲームに関するシンポジウムとワークショップについて」、京都芸術センター編『文化庁メディア芸術祭京都展 パラレルワールド京都』、2012 年 1 月、pp. 32-33

「「ゲーミフィケーション」の時代」、日本子どもを守る会編『子ども白書 2013』、2013 年 8 月、pp. 194-195

「デジタルゲームいまむかし——変わるものと変わらないもの」、国立民族学博物館編『月刊みんぱく』第 38 巻第 12 号 (通巻第 447 号)、2014 年 12 月、pp. 4-5

「ゲーム研究の現在——「没入」をめぐる動向」、『アステイオン』84 号、2016 年 5 月、pp. 217-221

「ビデオゲームの進化に人間の感性の本質を探る」、立命館大学研究活動報『RADIANT』Issue 6、2017 年 7 月、pp. 20-21

“Exploring the Nature of Human Senses and Perception in the Evolution of Video Games.” in: *RADIANT: Ritsumeikan University Research Report*. Issue 6, 2017 年 7 月, pp. 20-21

「混合趣味あるいは忘却されたマルチリンガリズム」、山下範久編著『教養としての 世界史の学び方』、東洋経済新報社、2019 年 4 月、pp. 408-414

(6) 翻訳論文 (単独訳)

ビルギット・リヒャルト著、吉田寛訳「ワーク・ユア・ボディー——現代ダンス・ミュージックのスタイル史」、『インターコミュニケーション』No. 29 (第 8 巻第 3 号)、1999 年 7 月、pp. 112-129

(7) 項目執筆等

「音楽美学」「音楽批評」「シューマン夫妻」「新音楽時報」「拍手」「標題音楽」「音楽批評について」、三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワグナー事典』、東京書籍、2002 年 3 月、pp. 92-94, pp. 184-185, p. 199, p. 274, pp. 299-300, p. 670

「楽劇」、佐和田敬司・藤井慎太郎・冬木ひろみ・丸本隆・八木斉子編『演劇学のキーワード』、ペリかん社、2007 年 3 月、pp. 101-105

(8) 書評

佐々木健一『エスニックの次元——《日本哲学》創始のために』、大阪大学生協同組合『読書探検』第 26 号、1998 年 10 月、pp. 11-13

Mark Evan Bonds, *After Beethoven: Imperative of Originality in the Symphony*, 日本音楽学会編『音楽学』第 45 巻 2 号、2000 年 4 月、pp. 176-179

西原稔『「楽聖」ベートーヴェンの誕生——近代国家がもつた音楽』、『季刊エクスミュージカ』第 2 号、2000 年 8 月、pp. 93-94

加藤有希子『新印象派のプラグマティズム——労働・衛生・医療』、『図書新聞』3076 号、2012 年 9 月 1 日、5 面

鈴木淳子『ヴァグナーと反ユダヤ主義——「未来の芸術作品」と 19 世紀後半のドイツ精神』、日本音楽学会編『音楽学』第 60 巻 1 号、2014 年 10 月、pp. 94-95

ヘイドン・ホワイト『実用的な過去』、『図書新聞』3342 号、2018 年 3 月 10 日、3 面

(9) 対談・座談会等の出版物

「「テレビゲームの感性的論理——ニューメディアと文化」討議」(太田純貴、吉田寛、河田学、唄邦弘(司会))、神戸大学芸術学研究室編『美学芸術学論集』第 7 号、2011 年 3 月、pp. 65-77

「〈老化〉するゲーム文化——ビデオゲームの三つのエイジングをめぐる」(上村雅之、河村吉章、サイトウ・アキヒロ、尾鼻崇、吉田寛(兼司会))、立命館大学生存学研究センター編『生存学』Vol. 4、2011 年 5 月、pp. 40-93

「分野別セッション ゲーム部門」(井上明人、新清士、堀浩信、吉田寛(兼モデレーター))、文化庁『平成 23 年度 メディア芸術部門会議 報告書』、2012 年 3 月、pp. 34-43

「シンポジウム 新たなメディア芸術への革新とコミュニティ形成」(畠中実、野村辰寿、表智之、吉田寛(兼モデレーター))、文化庁『平成 23 年度 メディア芸術部門会議 報告書』、2012 年 3 月、pp. 64-75

「オルタナティブな教育の場としての美術館」(服部正、島田康寛、竹中悠美(司会)、吉田寛、鹿島萌子)、立命館大学生存学研究センター編『生存学』Vol. 6、2013 年 3 月、pp. 7-48

「セッション 3 「異種混交的文化の批評的ポテンシャル」ディスカッション」「セッション 4 「全体討議〈前衛〉以降——〈批評〉のメタモルフォーゼ」」、文化庁『第 3 回世界メディア芸術コンベンション——異種混交的文化における〈批評〉の可能性』、2013 年 3 月、pp. 77-85, pp. 97-104, pp. 106-125

「共同討議 聴覚性の過去と現在」(渡辺裕、吉田寛、金子智太郎、長門洋平、福田貴成(司会))、表象文化論学会編『表象』09、2015 年 3 月、pp. 17-59

「反復性と追体験——触視的メディアとしてのゲーム／アニメーション (前)」(土居伸彰、吉田寛、東浩紀)、『ゲンロンβ』第 32 号、2018 年 12 月、pp. 87-149

「反復性と追体験——触視的メディアとしてのゲーム／アニメーション (後)」(土居伸彰、吉田寛、東浩紀)、『ゲンロンβ』第 33 号、2019 年 1 月、pp. 136-183

(10) 口頭発表

「E・ハンスリックの最初期の批評活動——「絶対音楽」の美学の成立過程とその社会政治的背景」、第 49 回美学会全国大会、京都大学吉田キャンパス、京都、1998 年 10 月 11 日

「ハンスリック論の歴史の変遷——時代を映す鏡としての音楽学」、日本音楽学会関東支部第 275 回定例研究会、成城大学、東京、1999 年 2 月 6 日

- 「神津仙三郎の『音楽利害』(明治24年)と明治前期の音楽思想——19世紀音楽美学史再考のために」、日本音楽学会第50回全国大会、東京藝術大学上野キャンパス、東京、1999年11月7日
- 「明治初期の音楽思想にみる『国楽』理念の位相——Popular, Folk, or National?」、コロキウムIV「日本近代における家郷創出と音楽」での分担発表、日本音楽学会第50回全国大会、東京藝術大学上野キャンパス、東京、1999年11月7日
- 「音楽美学に刻印されたドイツ性?」、シンポジウム「音楽の価値のありか——音楽美学は国民国家を超えられるか」での分担発表、日本音楽学会関東支部第282回定例研究会、東京大学本郷キャンパス、東京、2000年2月5日
- “Eduard Hanslick and the Idea of Musical “Public Sphere”: Formalist Aesthetics Reviewed within Socio-political Conditions.” Paper presented at the 15th International Congress of Aesthetics, Kanda University of International Studies, Makuhari, Japan, 2001年8月30日
- 「日本の音楽学はいつまで「輸入超過」なのか——音楽学会の「外」からのニーズに答える」、シンポジウム「知識人としての音楽学者」での分担発表、日本音楽学会第52回全国大会、北海道教育大学札幌校、北海道、2001年10月7日
- 「音楽学者の眼からみた『ロックミュージックの社会学』のアクチュアリティ」、書評セッション——南田勝也『ロックミュージックの社会学』(青弓社刊)での分担発表、日本ポピュラー音楽学会関西地区2002年度第1回例会、関西大学千里山キャンパス、大阪、2002年1月26日
- 「ロマン主義の音楽思想にみる「ドイツ的なもの」の表象——普遍性という名のポリティーク」、クロス討論「ロマン主義をめぐるドイツとフランス——イメージの交叉」での分担発表、日本シェリング協会第11回大会、駒澤大学駒沢校舎、東京、2002年7月6日
- “J. G. Herder’s Conception of Volkslied and an Invention of the Universal Taste.” Paper presented at International Congress of the Musicological Society of Japan: In Celebration of the 50th Anniversary, Shizuoka Convention & Arts Center “GRANSHIP,” Shizuoka, Japan, 2002年11月3日
- 「『国楽』の理念からみる日本の近代——「雅俗ノ差」の超克と「国民」の創造」、シンポジウム「『国楽』と国楽——概念とその歴史的事実」での分担発表、日本音楽学会関東支部第300回定例研究会(第71回日本音楽学会・東洋音楽学会合同例会)、成城大学、東京、2002年12月7日
- 「アドルフの音楽社会学は今日どこまで有効か?」、『アドルフ 音楽・メディア論集』を読む ～「ラジオ・シンフォニー」を中心に」での分担発表、日本ポピュラー音楽学会関西地区2003年度第1回例会、関西大学千里山キャンパス、大阪、2003年3月1日
- 「近代オリンピックにおける芸術競技(1912~48年)の考察——芸術とスポーツの境界問題をめぐって」、第56回美学学会全国大会、慶應義塾大学三田キャンパス、東京、2005年10月10日
- 「1840年前後のドイツの音楽界における「歴史の終焉」意識の諸相」、日本音楽学会第56回全国大会、明治学院大学白金校舎、東京、2005年10月23日
- 「可聴化されたネイション——音楽と《ドイツ的なもの》」、パネルC「近代の上演」での分担発表、表象文化論学会(仮称)設立準備大会、東京大学駒場キャンパス、東京、2005年11月20日
- 「リヒャルト・ヴァーグナーにおける「ドイツ的なもの」の理念の変遷」、早稲田大学COE演劇理論研究(西洋/比較)コース「オペラ/音楽劇の演劇学的アプローチ」プロジェクト第51回研究会、早稲田大学西早稲田キャンパス、東京、2006年1月17日
- 「アートか、スポーツか?——オリンピックの芸術競技の興亡をめぐって」、全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)研修会、東音ホール、東京、2007年3月8日
- 「『ビデオゲームに固有のもの』とは何か?——表象理論からのアプローチ」、GCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」第一回ビデオゲーム・カンファレンス《「遊び」としてのビデオゲーム》、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2009年2月2日
- 「聴覚の座をめぐる近代哲学の伝統」、第60回美学学会全国大会、東京大学本郷キャンパス、東京、2009年10月11日
- 「絶対音楽のモデルとしてのイタリア・オペラ?——範例なき理論/理論なき範例」、シンポジウム「メンデルスゾーンの「イタリア」——ドイツ人音楽家のイタリア旅行体験を多角的に検証する」での分担発表、日本音楽学会第60回全国大会、大阪大学豊中キャンパス、大阪、2009年10月25日
- 「ワーグナーの「チューリヒ的転回」——『未来の芸術作品』と『オペラとドラマ』の断絶を考える」、日本ワーグナー協会第117回関西例会、北浜ビジネス会館中会議室、大阪、2010年2月7日

- “Humanism without (Defining) Human? Memorandum on Professor Anne Phillips’ Paper “In (Partial) Defense of Cosmopolitanism.”” Paper presented at the International Conference: “Bonds and Boundaries: New Perspectives on Justice and Culture,” Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan, 2010 年 3 月 20 日
- 「ビデオゲームにとってリアルとは何か?——〈第三の次元〉の表現をめぐる冒険」、神戸大学大学院人文学研究科大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育」フォーラム「テレビゲームの感性的論理——ニューメディアと文化」、神戸大学六甲台第 2 キャンパス、兵庫、2010 年 11 月 13 日
- “Whose Democracy? The Spectre of the Nation in the Globalized Internet Age.” Paper presented at the 7th International Conference Multiculturalism and Social Justice “Democracy and Globalization,” Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan, 2011 年 1 月 8 日
- 「ビデオゲームの画面の独自性はどこまで記号学的方法によって定義・記述できるのか?」、セッション 3 「ゲームにおける身体的位置——時間／イメージ／インターフェイス」での分担発表、日本記号学会第 31 回大会、二松學舎大学九段キャンパス、東京、2011 年 5 月 15 日
- 「混合趣味の盛衰と民謡の発見——十八世紀ドイツ音楽とナショナル・アイデンティティ」、シンポジウム「音楽の国ドイツ?——音楽と社会」での分担発表、日本ドイツ学会第 27 回総会、朱鷺メッセ：新潟コンベンションセンター、新潟、2011 年 6 月 25 日
- 「マールブルクと音楽における「ドイツ的なもの」の構造転換——近代芸術思想における「ナショナルなもの」の成立過程」、日本音楽学会西日本支部第 4 回（通算 355 回）定例研究会、神戸大学鶴甲第 2 キャンパス、兵庫、2011 年 9 月 24 日
- 「文化庁メディア芸術祭の歴史にみるゲーム」、シンポジウム「メディア芸術の中のゲーム——これまでとこれから」での分担発表、文化庁メディア芸術祭京都展エンターテインメント部門「ゲームってアートなの?——エンターテインメントのいま・これから」、京都国立近代美術館、京都、2011 年 11 月 5 日
- 「〈カジュアル革命〉とゲーム文化のこれから」、シンポジウム「カジュアル化・ソーシャル化するゲーム——エンターテインメントの未来」での分担発表、文化庁メディア芸術祭京都展エンターテインメント部門「ゲームってアートなの?——エンターテインメントのいま・これから」、京都国立近代美術館、京都、2011 年 11 月 6 日
- 「カタストロフと自由／自由のカタストロフ」、セッション 3 「表象と媒介の可能性」での分担発表、第 8 回立命館大学大学院先端総合学術研究科国際カンファレンス「カタストロフィと正義」、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2012 年 3 月 22 日
- 「ゲームにおける行為と問題解決——ゲームの〈リアリティ〉再考のために」、立命館大学ゲーム研究センター (RCGS) 2011 年度第 7 回定例研究会、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2012 年 3 月 23 日
- 「ビデオゲームへの感性学のアプローチ——表象／認知／行為」、新潟大学人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」公開研究会「感性と心理——心の裏を解き明かすことはできるのか」、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」、新潟、2012 年 9 月 16 日
- 「〈批評〉するメディアとしてのゲーム」、第三回世界メディア芸術コンベンション (ICOMAG 2013) 「異種混交的文化における批評 (クリティーク) の可能性」(主催：文化庁)、セッション 3 「異種混交文化の批評的ポテンシャル」での分担発表、政策研究大学院大学、東京、2013 年 2 月 17 日
- “The Aesthetics of Video Games: What and How Do We Sense in the Game World?” Paper presented at Symposium “Japanese Computer Games and Entertainment,” the School of Language and Communication Studies, University of East Anglia, Norwich, United Kingdom, 2013 年 3 月 16 日
- “User-Centered Design in Video Games: Affordances, Constraints and Tutorials.” Paper presented at FTM Research Seminar Series, the School of Film, Television and Media Studies, University of East Anglia, Norwich, United Kingdom, 2013 年 3 月 18 日
- 「初期ビデオゲームの擬似 3 D 表現の再評価——絵画や映画、アニメーションとの比較考察を通して」、公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団第 20 回研究成果発表会（ポスター発表）、海運クラブ国際会議場、東京、2013 年 9 月 26 日
- “Game as a Dialectic between Rule and Freedom: Questioning the Limitation from Within.” Paper presented at International Workshop “Play, Media and Identity,” Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan, 2013 年 10 月 16 日
- 「リヒャルト・ワーグナーとパリ」、ワークショップ 4 「リヒャルト・ワーグナーと「フランス」」での分担発表、日本フランス語フランス文学会 2013 年度秋季大会、別府大学、大分、2013 年 10 月 27 日
- 「リマスタリング CD と作品概念の位相」、ワークショップ「ポピュラー音楽の美学と存在論 (2) ——今井論文をめぐるオープン・ディスカッション」での分担発表、日本ポピュラー音楽学会第 25 回大会、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス、兵庫、2013 年 12 月 8 日

- “Johann Gottfried Herder’s Folksong Project as an Early Interest in Intangible Cultural Heritage: Between Universalism and Nationalism.” Paper presented at International Symposium, with Music Concerts and Film Screenings. “Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage,” Goldsmiths, University of London, London, United Kingdom, 2014 年 2 月 20 日
- 「〈認知的=遊戯的人工物〉としてのビデオゲーム」、美学会西部会第 297 回研究発表会、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2014 年 2 月 22 日
- 「接触から震動へ——〈響き〉としての内面性の誕生」、シンポジウム「接触の表象文化論——直接性の表象とモダニティ」での分担発表、表象文化論学会第 9 回大会、東京大学駒場キャンパス、東京、2014 年 7 月 5 日
- “Game as Illusion.” Paper presented at “Replaying Japan 2014: 2nd International Japan Game Studies Conference,” University of Alberta, Edmonton, Canada, 2014 年 8 月 21 日
- “Meta-Framing Evolution of Digital Game.” Paper presented at International Conference: “Catastrophes, Digital Public Spheres and the Future of Democracy: 7th Annual Conference of the Rewriting Modern and Contemporary Japanese Intellectual History Project,” Zentrum für medizinische Physik und Technik (ZMPT) der Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg, Erlangen, Germany, 2014 年 9 月 13 日
- “Early Decades of Video Game Culture in Japan.” Paper presented at the 12th World Congress of Semiotics: “New Semiotics. Between Tradition and Innovation,” New Bulgarian University, Sofia, Bulgaria, 2014 年 9 月 17 日
- “Video Game Experience as Doubled Semiotic Process.” Paper presented at XIème colloque de la Société Française des études Japonaises: “Le Japon au XXIème siècle: dynamiques et mutations,” Université Paris-Diderot (Paris 7), Paris, France, 2014 年 12 月 12 日
- 「「ゲーム的リアリズム」問題再考」、招待セッション「ゲームの「ナラティブ」がどうしてこれほど問題になるのか？」での分担発表、KANSAI CEDEC 2015、大阪芸術大学スカイキャンパス、大阪、2015 年 2 月 7 日
- “Epistemic Sound in Video Games.” Paper presented at Music Research Series, the Unit for Sound Practice Research, Goldsmiths, University of London, London, United Kingdom, 2015 年 5 月 12 日
- “Aesthetics of Video Games.” Paper presented at Sixth Form Japan Day: A Global Perspective, a Door to New Opportunities, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, United Kingdom, 2015 年 11 月 5 日
- “Game and Its Borders in Digital Media.” Paper presented at Conferencia: “Crossing Point: Japanese Media Art, Game and Popular Culture,” MediaLab-Prado, Madrid, Spain, 2016 年 1 月 26 日
- “Videojuegos en Japón: Arte e industria.” Paper presented at Pública 16: Encuentros Internacionales de Gestión Cultural, Círculo de Bellas Artes, Madrid, Spain, 2016 年 1 月 28 日
- 「〈運のゲーム〉を考える」、セッション 3 「ギャンブルのメディア論——麻雀・競馬・パチスロ」での分担発表、日本記号学会第 36 回大会、大阪大学吹田キャンパス、大阪、2016 年 5 月 22 日
- “Playing over Death: A Perspective on Game Over in Video Games.” Paper presented at the 20th International Congress of Aesthetics, Seoul National University, Seoul, South Korea, 2016 年 7 月 26 日
- 「デジタルゲームプレイと「他者」への信頼」、『文化／科学』主催・日中韓国際会議「東アジア圏域のデジタル部族と青年文化」、釜山国際コンベンションセンター（BEXCO）、釜山、韓国、2016 年 11 月 18 日
- “Games in Games: From Bonus Stages to Virtual Archives.” Paper presented at Game Studies Seminar, the Center for Computer Games Research, IT University of Copenhagen, Copenhagen, Denmark, 2017 年 11 月 24 日
- “Next Level: Creating Larger Research Units in Game Studies: The Case of Japan.” Paper presented at DiGRA 2018: The 11th Conference of the Digital Games Research Association, Università di Torino, Turin, Italy, 2018 年 7 月 27 日
- “Early History of Epistemic Sounds in Digital Games.” Paper presented at Replaying Japan 2018, the National Videogame Arcade, Nottingham, United Kingdom, 2018 年 8 月 21 日
- 「メタゲーミングとトイフィケーション——〈ゲーム〉はどこにあるのか?」、立命館大学ゲーム研究センター（RCGS）2018 年度第 7 回定例研究会、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2019 年 3 月 8 日
- “Metagaming and Ecologies of Video Games.” Paper presented at NII Shonan Meeting, No. 132. “Modelling Cultural Processes,” Shonan Village Center, Zushi, Kanagawa, 2019 年 3 月 11 日

(11) 受賞

- 2015 年 12 月 サントリー学芸賞（第 37 回）
2016 年 6 月 日本ドイツ学会奨励賞（2015 年度）

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

国立音楽大学音楽学部（2000 年度～2007 年度）、多摩美術大学美術学部（2003 年度～2007 年度）、
聖心女子大学文学部（2006 年度～2007 年度）、
桐朋学園芸術短期大学ステージ・クリエイト専攻（2006 年度～2007 年度）、
早稲田大学オープン教育センター（2007 年度）、甲南大学文学部（2009 年度）、東京藝術大学音楽学部（2011 年度）、
京都大学総合人間学部（2011 年度）、新潟大学人文学部（2012 年度）、広島市立大学芸術学部（2012 年度）、
九州大学大学院統合新領域学府（2013 年度、2017 年度）、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科（2013 年度）、
大阪大学文学部・大学院文学研究科（2016 年度）、
ライブツィヒ大学歴史・芸術・オリエント学部（2017 年度～2018 年度）

(2) 学会

美学会、日本音楽学会、表象文化論学会、日本デジタルゲーム学会、国際美学連盟、国際記号学会

(3) その他

英国王立音楽協会「音楽と哲学」研究部会顧問委員（2010 年 9 月～現在）
文化庁メディア芸術祭京都展「パラレルワールド京都」プロジェクトチームメンバー（2011 年 10 月～11 月）
文化庁芸術祭執行委員会審査委員（第 73 回、2018 年）